リカードウの貨幣数量説と国立銀行設立試案

Ricardo's Quantity Theory of Money and 'Plan for the Establishment of a National Bank'

奥山 忠信

OKUYAMA, Tadanobu

要旨

本稿の課題は、リカードウの価値論と貨幣数量説との関係を明らかにし、この考察を踏まえて、リカードウの「国立銀行設立試案」(*Plan for the Establishment of a National Bank*, 1924)を考察し、現在のわが国への適用可能性を模索することにある。

貨幣数量説は、貨幣には内在的で固有の価値はないという貨幣価値論を前提とし、その上で貨幣の価値は需給関係で決まる、と説く。貨幣の価値は完全に需給関係だけで決まるという貨幣価値論を、貴金属貨幣について当てはめるのが貨幣数量説であった。しかし、古典派は、貨幣に内在的な価値を認める。生産費や労働価値論にもとづく価値論を、商品と同様に金や銀の貨幣に適用するのである。特にリカードウは労働価値論の代表的な論者であり、純粋な投下労働価値論を唱えている。貨幣数量説の代表者であると同時に労働価値論の代表者であることは、本来は不可能なはずである。これが「リカードウの貨幣数量説」の大きな問題であった。

結論から言えば、リカードウは地金論争に参加した初期においては、明確に貨幣数量説を採用していた。貴金属貨幣についても紙幣についても同様である。しかし、地金論争期には、リカードウは労働価値論を確立していない。彼の主著である『経済学および課税の原理』(*On the Principles of the Political Economy and Taxation* 1st 1817, 2nd 1819, 3rd 1823)において労働価値論を明確な形で提唱するとともに、貴金属貨幣に関しては、貨幣数量説は放棄される。

そして、貨幣数量説は紙幣に関して維持され、紙幣の価値を管理するための確実な方法として主張されるのである。紙幣それ自体は価値を持たないので、貨幣数量説が前提とする価値論と適合していたのである。

リカードウは晩年、イングランド銀行に代わる国立銀行の設立を模索するが、その草案である「国立銀行設立試案」のポイントは、紙幣に関する貨幣数量説の有効性を前提にした政府紙幣の発行であった。

Keyword

リカードウ、国立銀行設立、貨幣数量説、政府紙幣、ジェームズ・ステュアート
Ricardo, Establishment of a National Bank, Quantity Theory of Money,
Government Note, James Stuart

I 貨幣数量説におけるリカードウ問題

シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950) は、貨幣数量説という用語で、多くの異なった内容が語られている

(cf. Schumpeter [1954], p. 704, 訳第4巻1474頁) という。そして、このことに注意を喚起しつつ貨幣数量説を論じる。

シュンペーターは、『経済分析の歴史』の中で、貨幣数量説に関して2通りの整理を

行っている。まず、第2編第6章「価値と貨幣」の中で「貨幣数量説は、完成された貨幣論ではなく、貨幣の交換価値に関する命題 (proposition) に過ぎないので、今後、数量説 (the quantity theory) の代わりに数量命題 (quantity theorem) と呼ぶことにする」(Schumpeter [1954], p. 313, 訳第2巻 658頁) と述べた後で、次のように言う。

「貨幣命題は次の3つとなる。すなわち、第1に、貨幣の機能が貨幣として選ばれた商品価値に影響を及ぼし、金の交換価値の源泉から独立している訳ではないが論理的に区別される…、ということ、第2に、流通の中にある金の価値の決定のメカニズムは、産業用の金あるいは他の諸商品の価値の決定のメカニズムとは異なっているということ、第3に、それは単純ではないが非常に原始的 (primitive) な特別の定式 (specific schema) を提供したこと、である」(Ibid., p. 313, 訳同前, 657-658頁)

シュンペーターの奇妙な言い回しは、彼自身が古典派における貨幣数量説と労働価値論や生産費説との間の整合性のとれた解釈を示し得ないであることを意味している。そして、その解決を商品としての金の価値と貨幣としての金の価値を区別する、という方向に見い出そうとしているのである。すなわち、貨幣としての金の価値と商品としての金の価値は論理的に区別され (第1の点)、その決定メカニズムは異なる (第2の点) というのである。この2つを区別した上で、貨幣価値の決定理論として貨幣数量説を位置づけようというのである。

しかし、言うまでもないことだが、貨幣数量説の創始者であるロック (John Locke, 1632-1704) は、貨幣の価値と商品の価値の

決定メカニズムの同一性を主張し、後述するようにリカードウ (David Ricardo, 1772-1823) もまた、同様である。リカードウに即して、なおかつリカードウが貨幣としての金銀の価値と商品としての金銀の価値を論理的に区別し、その決定メカニズムを異なるものとして説いたとシュンペーターは言うが、その典拠を示していない。また、それがどのような理論なのかも示していない。

むしろ、こうした解釈は、貨幣数量説と労働価値論を共存させるためのシュンペーターの苦汁の表現と受け止められる。もともと共存できない理論を共存させることの無理、と言える。そして、ここから貨幣数量説に対するシュンペーターの低い評価、すなわち完成された理論ではないという評価がもたらされる。それは理論 (theory) ではなく、命題 (theorem) であると言うのである。そして、フィッシャーの交換方程式 ($MV=PT$ 、 M : 貨幣量、 V : 貨幣の流通速度、 P : 価格、 T : 取引量) を念頭に置きつつ、原始的である、と評したのである。

第3編第7章「貨幣、信用、景気循環」では、次のように言う。

「現在のわれわれの目的からして貨幣数量説は次のように定義される。第1に、貨幣の数量は独立変数 (an independent valuable) であり、とりわけ、価格や物的な取引量からは独立して (independent) 変動する。第2に、流通速度は制度的な与件 (datum) で緩慢に変化するか、あるいは全く変化しない。しかし、どのような場合にも価格や取引量からは独立している。第3に、取引量—あるいは産出量と呼びたいのだが—と貨幣量とは関係しない。この2つが一緒に動くのは偶然である。第4に、貨幣量の変化は、同一方向の

産出量の変化によって吸収されない限りは、増加した貨幣がどのように使用されるか、そして経済のどの部門に最初に影響するか、とは関係なく機械的に影響する。貨幣が減少する場合も同様である」(Ibid., p. 704, 訳第4巻, 1474頁)。

貨幣数量説は、たんに貨幣量と物価の比例関係を言うだけではなく、明確な因果関係がある。このことをシュンペーターは第1と第4の点としてあげている。すなわち貨幣数量が独立変数であって、これの変化が機械的に物価に影響する、と言う。そして、第2、第3の点として、貨幣の流通速度は慣習的な条件であり、産出量は貨幣量とは直接の関係はない、とする。

なお、流通速度 V の解釈については、シュンペーターは、フィッシャー (Irving Fisher, 1867-1947) の交換方程式 $MV=PT$ (M : 貨幣量、 V : 流通速度、 P : 価格、 T : 取引量) を変形して、流通速度を $V=PT/M$ と定義したとすれば、それは交換方程式そのものを同義反復 (tautology)、すなわち恒等式 $MV \equiv PT$ にしてしまう (Ibid., p. 315, 訳第2巻, 660頁、参照)、と指摘する。シュンペーターは、流通速度もまた独立に決まることによって、貨幣数量説が恒等式ではなく、因果関係を表わす式になると言うのである¹⁾。

また、貨幣数量説について、ブラウグ (Mark Blaug, 1927-2011) は、次のように言う。

第1に、因果関係の方向性として、貨幣量 M から価格 P 、すなわち、貨幣量の変化が原因で価格の変化が結果であること。この際に、最初の変化は、貨幣量が外生的 (exogenous) に変化することが想定されている²⁾。

第2に、貨幣の流通速度 V が一定である

こと、すなわち V の変化は、貨幣量 V の変化から独立している。

第3に取引量 T は、貨幣量や価格水準からは独立して決定される。

(cf. Blaug [1995], p. 29)

ブラウグもシュンペーターもフリードマン (Friedman [1964]) も共通に、貨幣数量説はその公式を貨幣量の変動を原因とし、価格の変動を結果として読み込むべきものとして解釈しているのである。

恒等式でしかないものに因果関係を読み込むのは、貨幣数量説のもつ独特の主張であるが、逆に恒等式でしかないとすれば、貨幣数量説そのものの存在意義が難しくなる。価格の上昇が原因で貨幣の増加が結果であると言うこともできるからである。後者は、必要流通手段量説ということになる。スミスやマルクス (Karl Marx, 1818-1883) はこの立場であり、本稿では『経済学および課税の原理』におけるリカードウもまた、この立場にあったと考える。

II 貨幣数量説におけるアダム・スミス問題

リカードウは、彼の議論の正当性をしばしばスミス (Adam Smith, 1723-1790) の『国富論』の中に求める。貨幣数量説についても同様である。

リカードウは、地金論争期の彼の初期論稿の一つで貨幣論の本格的な考察を含む「地金の高い価格 (1810)」の中で、次のように言う。

①「スミス博士は述べている。『効用 (utility)、美しさ (beauty)、および稀少性 (scarcity) という性質は、それらの金属の高い価格の、すなわちこれらのものがどこにおいても多量の財と交換されるということ

の本来的な基礎である。この価値はこれらの貴金属が鑄貨として用いられる以前から存在し、また鑄貨として用いられることから独立しているのであって、このような性質があったからこそ、それらはそのような使用に適しているのである』(Ricardo [1970a], pp. 52-53, 訳65頁)

②「貨幣として使用される世界の金および銀の分量がはなはだ少なくとも、もしあり余るほど多くても、そのことは、異なった国々にそれらが分配される比率に、少しも影響を及ぼさないであろう——すなわち、貴金属の分量における変動は、それらと交換される諸商品を相対的に高価もしくは安価にする以外の他の影響を、全く生み出さないであろう。より少ない貨幣の額はより大なる額のそれと同様に流通媒介物の機能を果たすであろう。その目的のためには、1000万は1億と同じほどの効果であろう。スミス博士は述べている。『貴金属が最も潤沢な鉱山であっても、世界の富にほとんど何も付け加えないであろう。その価値が主にその稀少性から生み出されるところの生産物は、潤沢になれば必ず価値が低下する』(Ibid., p. 53, 訳66頁)

③「もしも、これらの国のいずれかで金鉱山が発見されるならば、流通に投ぜられた貴金属の分量が増加するためにその国の通貨の価値が低下し、それゆえにそれは、もはや他の国々の通貨と等しい価値を持たなくなるであろう。金および銀は、鑄貨であるか地金であるかを問わず、他のあらゆる商品を支配する法則にしたがって、ただちに輸出商品となるであろう。…金と銀とがどこにおいてもひとつの価値に等しくなるまで、この状態は続くであろう。」(Ibid., p. 54, 訳67頁)

貨幣数量説は、ヒューム (David (Hume,

1711-1776) において古典的な形で完成する。それは理論の前提として貨幣の内在的価値、あるいは固有の価値を否定することが必要となる。この点では、ロックが貨幣の価値を「想像的 (imaginary)」(Locke [1963], p. 22, 訳31頁) としたことは決定的に重要である³⁾。貨幣数量説を完成させたヒュームにあっては貨幣の価値は「犠牲的 (fictitious)」(Hume [1955], p. 48, 訳70頁) なものであった。

ヒュームによって整理された貨幣数量説は、次の3点である。

第1に、貨幣量 (金や銀など貴金属) の変動が比例的に物価を上昇 (貨幣価値を下落) させること、第2に、貴金属貨幣には、一国における貨幣量の増加は貨幣価値の下落と物価の上昇を招くなど貿易上の条件の悪化を招き、結果的に貨幣の流出につながるという国際的な自動調節機構が働くこと、第3に、貨幣の増加は、貨幣が万遍なくいきわたるまでの過渡的な中間期間では、生産を刺激し経済を活性化させる効果があること (いわゆる連続的影響説)、である (奥山 [2011a]、参照)。

リカード自身は、引用に見られるように、明確な貨幣数量説の支持者である。ヒュームの提起した3点のうち、連続的影響説を除いては、ヒュームの貨幣数量説をほぼ継承している⁴⁾。

この時期のリカードの目には、アダム・スミスは貨幣数量説の論者として映っている。スミスを貨幣数量説の論者と見たのは、リカードウだけではない。アーヴィング・フィッシャーもまた貨幣数量説の論者として、ロック、リカードウらと並んでスミスの名をあげる (cf. Fisher [1916], p. 14, 訳18頁)⁵⁾。

しかし、ヴァイナー (Jacob Viner, 1892-

1970, Viner, [1965], p. 87, 訳89頁) やシュンペーター(Schumpeter [1954], p. 315, 659頁)は、スミスの貨幣数量説を否定する。

とは言えヴァイナーも指摘するように、スミスは初期の経済学研究である『大学講義』では、ヒュームの理論、貨幣量の増加と物価の上昇との関係、およびこれにもとづく国際的な金銀貨幣の自動調節機構を肯定的に紹介している(Viner [1965], p. 87, 訳89頁、Smith [1978], p. 507, 訳315頁)。

『大学講義』とは異なり、『国富論』においては貨幣数量説に対する肯定的な説明は行わず、後述するように貨幣数量説とは対立する必要流通手段量説の立場を鮮明にし、必要以上の貨幣量は市場から溢れ出ることを説いている。

貨幣数量説に対するスミスの変化は、彼の労働価値論の確立と密接に関係する。例えば『大学講義』の中で、スミスはダイヤモンドの価格について次のように言う。

「もし商品が稀少であれば、価格は上昇するが、もしその量が需要に応じて供給するのに十分以上であれば、価格は下落する。こうして、ダイヤモンドやほかの宝石が高価であり、他方で鉄が、はるかに有用であるのに何倍か安いのは、このためなのである」(Smith [1978], p. 496, 訳288頁)。

『大学講義』においては、価格のもっぱら需給関係と稀少性によって決まると考えられていたのである(*Ibid.*, 同前)。こうした価値論は、貨幣数量説と共存できる。そして『大学講義』における見解、すなわち宝石の価値は稀少性によって決まるとする見解は、『国富論』にも継承される。しかし、その内容は大きく異なる。『国富論』においては、宝石の価値の決定要因としても稀少性と労働とが

共存しているのである。これはスミス独特の価値論と言える。

「彼ら(金持ち…奥山)の目からすれば、いくらか有用であったり美しかったりするものの値打ち(merit)は、その稀少性によって、つまりそれをかなり多量に集めるのに必要な多量の労働、つまり彼ら以外誰も支払うことのできない労働によって高められる」(Smith [1981], p. 190, 訳第1分冊301頁)。

「宝石に対する需要は、その美しさから生じる。…またその美しさという値打ちはその稀少性によって、つまり鉱山から取得するときの困難さと費用によって、大いに高められる」(*Ibid.*, p. 191, 訳302頁)。

宝石の高価さの根拠となる稀少性は、多くの労働を可能とする条件となるのである。

貨幣についても同様である。

「ある特定の金銀が購買または支配し得る労働の量、つまりそれと交換される他の商品の量は、そうした交換が行われるときにたまたま知られている鉱山の豊度が高いか低いか(the fertility or barrenness of the mines)⁶⁾に依存している。アメリカ大陸の鉱山の発見は、16世紀に、ヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の3分の1に引き下げた。それらの金属を市場に運ぶのにより少ない労働しかかからなかったから、それらが市場に運ばれたとき、より少ない労働しか購買または支配できなかった。」(*Ibid.*, pp. 49-50, 訳67頁)

この引用は、スミス価値論の解釈にも重要な示唆を与えている。スミスは、投下労働をそのまま価値の尺度とするのではなく、支配労働を価値の尺度としていたが、その支配労働の前提には投下労働があり、投下労働の変化が支配労働を変化させることが、金の生産を事例に語られているのである。この点で、

金貨幣の価値は、採掘と運搬に必要な労働量によって決まるのである⁷⁾。貨幣数量説とは正反対の考えである。価格革命の原因は、中南米の鉱山の採掘費用の安さにあるのである。

初期リカードウがスミスを貨幣数量説と見なした文言は、稀少性の背後の生産費用の増大を想定するものになっていたのである。稀少なものは多くの労働を費やしたとしても需要があり、稀少性にもとづく価値論と労働価値論とは、矛盾しないものとして確立していたのである。初期リカードウの目にスミスの『国富論』の理論が貨幣数量説と見えたのは、初期リカードウ自身が貨幣数量説だったがため誤読と言える。

そして、スミスは先にも指摘したように、貨幣数量説とは反対に貨幣が市場から拒否される局面を指摘する。以下のようなのである。

「一国で年々売買される財の価値は、その財を流通させ、本来の消費者に配分するために一定量の貨幣を必要とするが、それ以上の貨幣を必要とすることはできない。流通の水路 (channel of circulation) は、それを満たすにたりる額の貨幣を必然的に引き寄せはするが、それ以上はけっして受け容れない。」
(*Ibid.*, p. 441, 訳第2分冊279頁)

これは貨幣数量説とは対極の立場と異なるいわゆる流通手段に関する必要流通手段量説である。

Ⅲ 政策としての貨幣数量説

リカードウの貨幣数量説の最大の問題点は、次のことにある。すなわち、貨幣数量説は、貨幣には内在的で固有の価値はないという貨幣価値論を前提とし、その上で貨幣の価値は需給関係で決まる、と説く。貨幣商品に、生産費のような内在的な価値を仮定すれば、貨

幣価値は変動しても収斂の重心点を持つことになる。これに対し貨幣数量説は、貨幣量が増えれば貨幣価値は限りなくゼロになり、貨幣量が減れば貨幣価値は限りなく無限大になると見なす。古典派の自然価格のような貨幣の内在的な価値を認めれば、貨幣数量説とは馴染まないのである。

リカードウにとっては、労働価値論と貨幣数量説の関係は入り組んでいる。しかし、結論から言えば、リカードウは地金論争に参加した初期の理論においては、明確に貨幣数量説を採用していた。貴金属貨幣についても紙幣についても同様である。しかし、地金論争期には、リカードウは労働価値論を確立していない。

彼の主著である『経済学および課税の原理』(*On the Principles of the Political Economy and Taxation*, 以下『原理』と略記)においては、労働価値論が明確な形で提唱されるとともに、貴金属貨幣に関しては、貨幣数量説は放棄される。

そして、貨幣数量説は紙幣に関してのみ維持され、紙幣の価値を管理するための確実な方法として主張されるのである。紙幣それ自体は価値を持たないので、貨幣数量説が前提とする価値論と適合していたのである。

リカードウは晩年、イングランド銀行に代わる国立銀行の設立を模索するが、その草案である「国立銀行設立試案」のポイントは、紙幣に関する貨幣数量説の有効性を前提にした政府紙幣の発行であった。

以下、内容に立ち入る。

リカードウが経済学に関わりを持ち、論壇に登場したのは、いわゆる地金論争においてであった。ナポレオン戦争期にイングランド銀行は金の兌換停止に踏み切る (1797)。唐

突に不換紙幣となったイングランド銀行券の下で、徐々に物価は上昇し、不換紙幣化した銀行券は金に対しても値を下げる。これが金価格の上昇問題である。

兌換停止前のイングランド銀行は、金1オンスについて3ポンド17シリング10・1/2ペンスのレートで、無制限で無料の自由鑄造制度を採用していた。これが金の公定価格であった。兌換停止後、しばらくは金価格は安定していた。しかし、1801年1月に4ポンド6シリングに高騰し、一旦旧水準に戻る。そして、1809年に再度急騰し、7月4日に4ポンド12シリング10・1/2ペンスになる。同時に、金の騰貴は、ポンドの為替相場の下落をとまなう。

地金論争に関与したリカードウは、金価格の上昇の原因をイングランド銀行の兌換停止とその後の不換紙幣となったイングランド銀行券の過剰発行に求めた。この理解は、紙幣に関して貨幣数量説を受け入れていたことを物語る。しかし、貴金属貨幣についてはどうか。以下、リカードウの金や銀の貴金属貨幣に関する貨幣数量説に関係する代表的な文言を抜粋する。

まず、「ボウズンキト氏の『地金委員会報告書にたいする実際的観察』への回答(1811)」では、「もし鉱山が貨幣の量を2倍にするならば、鉱山は貨幣の量と同じ割合で貨幣の価値、を低下させるであろう」(Ricardo [1951d], p. 217, 訳256頁)、と言う。そして、これに関連した注の中では、「諸商品の価格が、貨幣の増減に比例して上下するであろうということを、私は、議論の余地のない事実として前提する」(Ibid., p. 193, 訳228頁)と断言する。

さらに「ベントム『物価論』評注」では、

「私は最近40年間における貨幣価値の低落の原因を、貨幣材料である金属の量的増加に帰しているのだから、これからの40年間における貨幣価値の同様の低下をいうには新たな貴金属の鉱山を発見しなければならない」(Ricardo [1951e], p. 269, 訳317頁)、と言う。

この二つは代表的な文言と言える。すなわち、地金論争期、論壇に登場した時のリカードウは、貴金属貨幣に関しても紙幣に関しても、明確に貨幣数量説の信奉者であった。

この時期、リカードウは労働価値論を確立していない。問題は労働価値論と貨幣数量説との関係である。労働価値論の成立期にあたる「経済的でしかも安定した通貨のための提案(1816)」では、次のように言う。まず、紙幣に関しては、明確に貨幣数量説の立場を採用する。代表的な文言は以下の箇所である。

「紙券が金属通貨に対して持っている長所の一つとして、…商業および一時的な事情の必要に応じて、その数量が容易に変更され得るということである。これによって、貨幣の価値を不変に保つという望ましい目的が、他の方法によって実現できる程度までは、安全にしかも安価に達成され得るのである。」([1951f], p. 55, 訳66頁)

「紙幣の使用にとまなうあらゆる他の利益のほかに、なお数量を慎重に管理することによって、あらゆる支払を履行するための流通媒介物の価値に対して、他の方法によっては到底得られないような価値の普遍性を確保される。」(Ibid., p. 58, 訳68頁)

ここで紙幣に関する貨幣数量説は、紙幣管理のための政策の手段として明確に位置づけられている。この政策の妥当性の是非は別として、後の議論からすれば、リカードウの大

きな功績と言える。貨幣数量説が正しいとすれば、貨幣は貴金属よりも紙幣の方がよいと考えられていたのである。紙幣それ自身は、内在的価値を持たないからである。そこで人為的な貨幣管理の手段として紙幣が位置づけられ、理論的根拠が貨幣数量説におかれていた。

また、貴金属貨幣に関する次の箇所は、リカードウの考えの変化を物語る。

「銀の採掘が困難になったため銀地金が2倍になったと仮定しよう、…そうすると、その場合の貨幣の必要量は以前の半分にすぎなくなるであろう。」(Ibid., p. 56, 訳67頁)

これは、銀貨幣の価値は、銀貨幣の数量ではなく、採掘の困難や投下労働によって決まることを説いている。貨幣数量説とは、全く逆の考えである。

リカードウの紙幣論は、ジェームズ・ステュアートを意識したものである。ジェームズ・ステュアートは、1767年に大著『経済学原理』を刊行する。この中で当時の最大の問題の一つである不変尺度論争に解答を与えるために新しい貨幣論を展開する。ステュアートは、それ自身価値のない紙幣の中に、不変尺度としての貨幣の理念を見ていたのである。言うまでもなく、その後の貨幣の歴史からは、紙幣の中に不変の価値尺度を見出すことはできない。

しかし、ステュアートの理念的な貨幣の考え方は、リカードウの中に受け継がれる。

「この特定の本位を持たない通貨の概念を最初に提唱したのは、私の信ずるところによれば、サー・ジェームズ・ステュアートである。(注：鑄貨と貨幣の問題に関するサー・ジェームズ・ステュアートの著作は教訓に富んでいる。…リカードウ)しかしながら、そ

のように組織された貨幣の価値の不変性を確かめ得る基準を提供することは、いまだかつて誰もなし得なかったのである。」(Ibid., p. 69, 訳70頁)

ステュアートは、貨幣数量説による紙幣の管理を考えていない。むしろ貨幣数量説に対する本格的な批判者である。貨幣量と需要とはステュアートにとっては別のものであり、価格に影響するのは需要にもとづく現実の購買だからである。貨幣量の増加は需要の増加に結びつくとは限らないので、貨幣数量説は一般的な原理としては成立しない、というのがステュアートの見解である。

しかし、リカードウはステュアートの貨幣数量説批判は受け入れずに、ステュアートが紙幣の中に見ていた不変尺度としての理念的な貨幣像を受け止め、これを紙幣に関する貨幣数量説によって政策的に実現しようとしていたのである。

貨幣数量説が正しいとすれば、貨幣量の管理は極めて容易になる。貨幣数量説について、フィッシャーの交換方程式を用いる。経済学でもっとも知られた $MV=PT$ である。Mは貨幣量、Vは貨幣の流通速度、Pは価格、Tは取引量である。貨幣数量説は、貨幣量の変化を独立変数とし、これを原因と考える。物価の上昇は、従属変数であり、結果である。

MとVの積は、購買の総額であり、PとTの積は、販売の総額である。一定期間の購買の総額と販売の総額は常に等しい。これは自明である。この式は常に成り立つ式であり、疑問の余地はないことになる。

ここでVとTとが一定であるなら、貨幣量の増加は比例的に物価を上昇させる。これをそのまま政策手段とすれば、物価を2%上昇させるためには、貨幣量を2%増やせばよ

いことになる。交換方程式は自明の式であり、したがって貨幣数量説は機械的に成立する。しかも貨幣数量説は、貨幣量の変化が独立して生じると考えているので、そのまま政策手段となる。完全な紙幣管理が可能となるのである。

また、リカードウは、銀行券と地金との兌換制度をも提案している。地金は実質的には流通できないので、これは紙券中心の鑄貨システムへの布石であった。しかし、貨幣価値の安定を図ることはできても、経済的なパニックは別である。そもそもパニックに対応できる銀行システムは存在しないと言うのである (*Ibid.*, p. 68, 訳80-81頁)。これは至言である。

リカードウは主著『経済学および課税の原理』において、投下労働価値説を確立し、金の価値に関して次のように言う。

まず、金や銀の価値についても他の商品と同様、労働時価値論を適用する。その上で、『原理』「第27章 通貨と銀行」では、貨幣「数量と価値とを左右する一般法則」(*Ibid.*, p. 352, 訳404頁)について次のように言う。リカードウと貨幣数量説との関係を示す典型的な箇所である。

まず、金や銀の価値については、労働価値論が適応される。

「金および銀は、他のすべての商品と同様に、それを生産して市場にもたらすのに必要な労働量に比例した価値を持つにすぎない。」(*Ibid.*, p. 352, 訳404頁)

「一国に必要とされる貨幣の量は、労働によって決められた貨幣の価値によって決まる。」(*Ibid.*, 同前)

その上で、貨幣価値と貨幣量の関係については、次のように記述されている。

「通貨はけっしてあふれるほど豊富になることはあり得ない。というのは、その価値を減少させれば、それと同じ割合でその数量が増加するし、その価値を増加させれば、その数量が減少するからである。」(*ibid.*, 同前)

この引用箇所の趣旨は明確である。貨幣数量説であれば、貨幣の量が貨幣の価値を決めると考える。しかし、引用におけるリカードウは、貨幣の価値が市場における貨幣の量を決めると説明している。市場の規模の方が必要貨幣量を調整する、と考えているのである。

貨幣が市場から溢れ出ると考えるかどうか、貨幣数量説であるかどうかの一つの分かれ目になる。貨幣数量説では、貨幣が市場から溢れ出ることはいない。貨幣価値が下がり続けるだけである。市場は無限に鑄貨を受け入れる。先の引用箇所でのリカードウは、過剰な貨幣は市場から溢れ出ると考えているのである。

『原理』でのリカードウは、過剰な鑄貨は鑄つぶされたり海外に送られたりして調整されると考えている。この見解は、貨幣数量説と対極に立つ必要流通手段量説である。

他方、紙幣の価値については次のように述べる。

「紙幣の全製作費は鑄造手数料とみなされるであろう。それは少しも内在的価値を持たないのだけれども、しかもその数量を制限することによって、その交換価値は、相等しい呼称の鑄貨、またはその鑄貨に含有される地金と、同じ大きさになる。」(*Ibid.*, p. 353, 訳405-406頁)

紙幣は内在的価値をもたないことで、貴金属のような貨幣とは異なり、需給関係で価値が決まる。したがって、紙幣の数量を制限することで、金鑄貨の価値と同じように紙幣の

価値を維持することができる、と考える。

そして、リカードウは、金本位制を維持しつつ実質的には兌換しないシステムを理念として提唱する。

「これらの原理にもとづいて、紙幣はその価値を確保するために正貨と兌換し得るものでなければならないという必要はない、ということが分かるであろう。ただ、その本位として布告されている金属の価値に応じて調整されるべきである。」(Ibid., p. 354, 訳407頁)

紙幣に関する貨幣数量説が完全な理論であるなら、金や銀の貨幣は何のために必要となるのか。リカードウは、次のように言う。

「経験の示すところでは、国家にしろ、銀行にしろ、それがかつて無制限な紙幣発行権を持った場合には、いつでもその発行権を濫用した。それゆえに、すべての国家において紙幣の発行は何らかの制限および統制の下におかれるべきである。そしてその目的のためには、紙幣の発行者に、その銀行券を金貨または金地金のいずれかで兌換すべき義務を負わせるのが、もっとも適当であると思われる。」(Ibid., p. 356, 訳409頁)

現実的には、発行主体は発行権を濫用する。このため、兌換制度によって発行主体を制約する必要がある、と言うのである。極端に言えば、兌換制度は、本当はなくてもいいのだが、発行主体の自己規制能力に問題があることから必要となるのである。リカードウには、人間の紙幣管理能力への不信と紙幣に関する貨幣数量説への確信が同居していたと言える。

「国立銀行設立試案(1824年6月刊行、1823年7-8月執筆)」(Plan for the Establishment of a National Bank) では、リカードウは、政府紙幣を積極的に推奨する。イングランド銀行は、発券と貸付という「互いになんの必

然的関連もない2つの業務」(Ibid., p. 276, 332頁)を行っているが、「もしも政府が、イングランド銀行から借り入れる代わりに、自身で独占的に紙幣を発行するならば、…イングランド銀行は、もはや利子を受け取らないであろうし、政府はもはや利子を払わないであろう。…現在ロンドンで流通している1600万の紙幣が、政府の手で発行されようと、一銀行の手で発行されようと、何の違いもないからである」(Ibid., p. 277, 333頁)、と言う。

イングランド銀行券の発行に代えて、国立銀行による政府紙幣の発行を提唱するのである。リカードウの提案は、「5人の委員を任命し、この国の紙幣全部の発行権をこの人々だけに委ねるべきである」(Ibid., p. 285, 訳342頁)、とすることである。ただし、この場合にも、「ロンドンの委員は、標準的な純度の金を、いくらでも買う義務を負うべきである」(Ibid., p. 288, 訳347頁)とされ、「国立銀行設立の瞬間から、委員たちは、要求があり次第、政府紙券や手形を金貨で支払う義務を負わせられるべきである」(Ibid., pp. 289, 訳347頁)、と言う。

金本位制を背景とした政府紙幣の流通が提案されていたのである。これは、「国立銀行設立試案」、リカードウの貨幣数量説、それに金兌換制度研究が統合したものであり、リカードウの貨幣論の成果の結実したものであった。

この国立銀行論は、政策手段としては極めて興味深い。現在はほとんどの国の中央銀行は、形式的には民間銀行である。アメリカのFRBも含めて、各国の中央銀行は株式会社である。日本銀行も例外ではない。中央銀行券は国家によって受領の義務を負わされているので国家の関与の下に流通していると言え

るが、政府紙幣ではない。支払いの義務のない奇妙な債務である。形式的には、日本銀行が日本銀行券の所有者に対して負っている借金である。したがって、信用を得るために日本銀行の資産を担保に銀行券が発行されている。

リカードウがイングランド銀行に代わる国立銀行の設立を提言したように、日本銀行が国立銀行になれば、事態は大きく変わる。現在、日本銀行は大量の国債を購入しているが、金融機関からの購入の対価は、金融機関が日本銀行に持つ口座の預金残高の増加になるだけである。現実の日本銀行券が印刷されているわけではない。現在、民間銀行が持つ日本銀行の口座の中には大量の預金が眠っている。使用されずにおかれているので、「ブタ積み」という隠語で呼ばれている。

極端な例では、日本銀行が国債を買い切った段階で日本銀行を国有化すれば、国債は消えるのである。「ブタ積み」状態が続く限りは、インフレの心配もない。

中央銀行の国有化論は、リカードウから200年の時を超えて、検討の価値のある提案となっている。

IV 必要流通手段量説

リカードウの貨幣数量説は、金貨幣に関しては放棄され、紙幣に関しては、むしろ積極的な貨幣価値管理の手段として位置づけられていた。貴金属貨幣に関しては、商品流通の方が決定要因であり、貨幣量はこれに合わせて、自由鑄造制度や産金部門の対応を通して調整されると考えるのである。トウクの膨大な実証研究『物価史』(Tooke [1998])はこの考えに立つ。

このリカードウの見解を継承し、必要流通

手段量説として定式化したのがマルクスである。必要流通手段量説は、貨幣数量説の対極に立つ。

マルクスは、商品流通界には必要な流通手段量が存在すると考える。これはもちろん、マルクスに固有の理論ではなく、スミスをはじめ多くの論者が論じてきたことである。必要流通手段量とは、経済がなめらかに進行するために必要で適正な貨幣量と言う意味である。特に市場経済の確立期には、購買手段としての貨幣そのものが不足し、現物での交換が余儀なくされるような文字どおりの貨幣不足の局面もあったと思われる。

マルクスの場合、こうした必要流通手段量は労働価値説との関係で導かれる。

「商品世界の流通貨幣のために必要な流通手段の量は、既に諸商品の価格総額によって規定されている。実際、貨幣は、ただ、諸商品の価格総額で既に観念的に表わされている金総額を実在的に表わすだけである。」(Marx [1971a], S. 131, 訳198頁)

マルクスの見解は、この引用に集約される。マルクスの場合、商品の価値は労働時間によって決定されている。貨幣である金も、その価値は労働時間によって決定されている。そして商品の価格は、商品と貨幣との価値量の等価性を反映すると考えられている。したがって、流通手段として機能する貨幣量は、商品の価格総額によって決まるのであって、逆ではない、と言うことになる。貨幣数量説批判としては、貨幣数量説のように貨幣量の増加が商品価格の上昇をもたらすのではなく、商品価格の上昇が貨幣量の増加をもたらす、と言うのである。マルクスが示す流通必要貨幣量の等式は次のようになっている。

諸商品の価格総額／同名の貨幣片の流通回

数＝流通手段として機能する貨幣の量

この式は、マルクスの場合、あくまでも必要貨幣量を算出するための等式である。なぜなら、商品の価格総額は、労働によって決定された価値の表現であり、価値は交換によって決定されるものではないからである。

貨幣の流通回数あるいは流通速度は、相殺要因として働く。すなわち、マルクスにとっては、例えば商品価格総額の増加が流通回数の増加によって相殺されれば、そのまま流通手段量の増加につながることはない。

貨幣数量説の場合には、貨幣量の増加が貨幣の流通速度の減少を伴う場合には商品価格の上昇は相殺されることになる、ということが低く評価される。貨幣数量説が成り立つためには、貨幣の流通速度が一定という条件が必要になるのである。そして、流通速度が一定という条件の下では、貨幣量が増加すれば、商品価格が上昇するという関係が導かれる。この場合には、商品価格の前提となる商品価値が労働によって決定されていないからである。

したがって、マルクスと貨幣数量説との対立点は、貨幣の価値概念にある。この限りでは、マルクスの労働価値論そのものが、彼の貨幣数量説批判を導いていたと言える。マルクスは自説を次のように要約する。

「流通手段の量は、流通する商品の価格総額と貨幣通流の平均速度によって規定されるという法則は、諸商品の価値総額が与えられていて、それらの変態の平均速度が与えられていれば、通流する貨幣の量は、その価値によって決まる、というように表現することもできる。」(Ibid., S. 136-137, 訳207頁)

マルクスは、必要流通手段量説として、ペティ (Sir William Petty, 1623-1687) とスミ

スをあげている。

ところで、貨幣としての金の存在量はその年の生産物ではなく、そのほとんどが、それまでに産出された金のストックである。有史以来のストックと言っても過言ではない。年々加えられる金量は微々たるものにすぎない。また、金は装飾品や工業原料等にも使用されており、それらはいつでも溶解されて貨幣に転換される。マルクスは、こうした特徴を持つ金貨幣の価値も商品と同様に労働によって決定される、と考えている。

「商品の流通部面には一つの穴があって、そこを通って金（銀、要するに貨幣材料）は、与えられた価値のある商品として流通部面に入ってくる。この価値は、価値尺度としての貨幣の機能は、したがって価格決定に際しては、既に前提されている。」(Ibid., S. 131, 訳199頁)

流通部面の「一つの穴」とは、地金や原産地からの金の流入であり、この金と商品との交換が貨幣としての金の価値を決めると考えているのである。したがって、貨幣が商品の価格に影響するのは、貨幣量の変動ではなく、貨幣の価値変動ということになる。そしてマルクスの場合、貨幣価値の変動とは、労働によって決定された貨幣価値の変動である。例えば、豊度の高い鉱山からの金の流入は、金量の増加が原因となって商品価格を上昇させるのではなく、追加された金が、豊度が高く生産性が高い鉱山から産出されたために価値が小さくなり、この結果として商品価格が上昇するということになる。このようにして、労働価値論が貫かれるのである。

流通手段を補強するものが貨幣の貯水池である。マルクスは、媒介物として登場する貨幣が無限の蓄積の対象となることを重視する。

「貨幣蓄蔵の衝動はその本性上、無際限である。」(Ibid., S. 147, 訳226頁)

貨幣蓄蔵は、流通界からの貨幣の引き上げによっても生じるが、金銀をそのまま所有したり、装飾品として所有したりすることによっても生じる。金や銀の貨幣の場合には、溶解によっていつでも鑄貨に復帰することができる。同じ商品貨幣でも、家畜や布やタバコなどとはこの点で大きく違う。金鑄貨の形態をとっていなくてもかまわないのである。

蓄蔵貨幣や「貨幣の潜在的な供給源」は、マルクスによれば、必要流通手段量と密接に関係した経済的に重要な機能を果たす。

「商品流通が規模や価格や速度において絶えず変動するにつれて、貨幣の流通量も休みなく満ち引きする。だから貨幣流通量は収縮し膨張することができなければならない。ある時は貨幣が鑄貨として引き寄せられ、ある時は鑄貨が貨幣としてはじき出されなければならない。」(Ibid., S. 148, 訳227頁)

「この条件は、貨幣の蓄蔵貨幣形態によって満たされる。蓄蔵貨幣の貯水池は、同時に、流通している貨幣の流出および流入の水路として役立ち、それゆえ、流通する貨幣は、その流通水路から溢れ出ないのである。」(Ibid., S. 148, 訳227頁)

蓄蔵貨幣が、流通必要貨幣量の調整役を果たす、と言うのである。

この点、マルクスは、リカードウと同様に、金属貨幣についての必要流通手段からの貨幣数量説批判の立場にある。その論拠は、貨幣である金は、内在的な価値を持ち、この価値を基準に、必要流通手段量が、産金部門や地金と金鑄貨との鑄造と溶解によって調整されると考えていたことによる。しかし、このことは一転して、それ自身に価値のない貨幣で

ある紙幣については、それが必要貨幣量を越えた場合、貨幣数量説の適用範囲になる、という見解につながる。

結 語

リカードウは、一般的には貨幣数量説の代表的な論者として受け止められている。しかし、本稿で見たように、リカードウの貨幣数量説は、地金論争期のリカードウの理論である。言い換えれば、労働価値論形成以前のリカードウの理論と言える。そしてリカードウにとっての労働価値論の形成は、貨幣数量説に対する対応を変化させ、主著『経済学および課税の原理』では、リカードウは金属貨幣に関する貨幣数量説から離れたと見てよい状態になっている。

貨幣としての金の価値の決定と一般商品の価値の決定が同じ労働価値論によって決定され、これにもとづいて利潤率を媒介とした生産調整が行われること、地金と金鑄貨との間の自由鑄造制度が、必要流通手段量を調整することによって、金貨幣に関しても労働価値論あるいは生産費説の法則的な展開を認めることとなった。

このことによって、貨幣の価値の決定を純粹な需給関係だけで依存するものとする貨幣数量説とリカードウの見解とは相容れないものとなった。

しかし、それ自身の価値を持たない紙幣に関しては、リカードウは強固な貨幣数量説の論者であった。ステュアートが紙幣の中に貨幣の理念としていた不変の価値尺度を見たように、リカードウは仮に貨幣数量説によって紙幣が管理されれば不変尺度とさえなり得るものと考えていた。

このことが、晩年のイングランド銀行の廃

止と国立銀行の設立案につながる。リカードウは金属貨幣に関する貨幣数量説からは離れたが、紙幣に関しては、なるべく多くの貨幣を金から紙幣に変えて流通させることを期待していたのである。賢人による貨幣の管理というやや唐突な提案も、リカードウの貨幣数量説に対する信頼の表れであった。

注

- 1) ブラウグはリカードウを貨幣数量説と見ている。貨幣量の変化を外生的なものを見なすかどうかを貨幣数量説の基準とすると、ホランダーが言うように (Hollander [1979], p. 476, 訳、下、451頁、参照)、リカードウはこの規定を満たしていない、ということになる。リカードウは、金鑄貨の自由鑄造制度とイングランド銀行券の兌換制度によって、地金が鑄貨として供給されるシステムを構想しているからである。
- 2) ホランダーは、リカードウの完全に機能している金本位制の下では、価格水準が所与と想定されているので、この命題は、成り立たないという。そこでは貨幣供給が従属変数 (In this sense it is the money supply that is taken as the 'independent' variable.) だというのである。 (*Ibid.*, p. 476, 訳451頁)
- 3) マルクス (Karl Marx, 1818-1883) は、「ロックは、金銀に価値がないことと、量によるそれらの価値の規定との関係を、次のように単刀直入に述べている」 (Marx [1969], S. 138)、として、ロックが貨幣の価値を「想像的価値」と規定してことを引用する。
- 4) リカードウは「ベンサム評注」の中で貨幣量の増大が生産を刺激するといういわゆる連続的影響説については、これに否定的な評価を下している。「貨幣は財貨を喚起することはできない。—しかし、財貨は貨幣を喚起することができる (money cannot call forth goods but goods can call forth money) (Ricardo [1870b], p. 301, 356頁)、「私は、貨幣の増大は減多に財貨

の増大を引き起こさない、そして、仮にそうなったとしてもそれは物価が新しい水準を見つけ出す以前であろうという意見である。それは、労働の賃金の一部を短期間資本に換えることによって、引き起こされるであろう」 (*Ibid.*, p. 302, 訳357頁)。

- 5) 堂目卓生 [2008] は、スミス理論の解説のなかに貨幣数量説を含めている。
- 6) the fertility or barrenness of the mines の部分を水田訳『国富論』は、「産出量の大小」(67頁)と訳しており、これは、スミスが貨幣数量説を採用していたかのような誤解を生む。
- 7) 「どの種類の鉱山でも、豊鉱といわれるか貧鉱といわれるかは、一定量の労働によってそこからもたらされる鉱物の量が、同一量の労働によって同じ種類の他の大部分の鉱山からもたらされるものよりも、多いか少ないかによるだろう」 (*Ibid.*, p. 182, 290-291頁)

参考文献

欧米文献

- Blaug, Mark [1995], 'Why is the quantity theory of money is the oldest surviving theory in economics', *Quantity Theory of Money*, Blaug, Mark, et al., Edward Elgar, Cheltenham, UK.
- Blaug, Mark [1985], *Economic Theory in Retrospect*, Cambridge University Press. (M・ブローグ著 久保芳和、真実一男訳 [1982]『経済理論の歴史 I』古典学派の展開、東洋経済新報社)
- Fisher, Irving, [1916], *The Purchasing Power of Money: Its Determination and Relation to Credit Interest and Crises*, The Macmillan Company, New York. (『貨幣の購買力』、金原・高木共訳、改造社、1936)
- Fisher, Stanley [1982], Seigniorage and the Case for a Nation Money, *Journal of Political Economy*, 1982, vol. 90, no. 21.
- Friedman, Milton [1964], 「貨幣理論の現状」、安

- 井琢磨・熊谷尚夫・西山千明編『近代経済学講義』、創文社、1964、所収。
- Glasner, David [1985], A Reinterpretation of classical monetary theory, *Southern Economic Journal*, 51 (1) : 46-67.
- Hollander, Samuel [1979], *The Economics of David Ricardo*, Univers of Toronto Press. (『リカードの経済学』、菱山泉・山下博監訳、日本経済新聞社、上、下、1998)
- Hume, David [1955], *Political Discourses*, 1752, *Writings on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, University of Wisconsin Press. (ヒューム『経済論集』、田中敏弘訳、東京大学出版会、1967)
- Keleher, R. E. [1991], The Use of Market Prices in Implementing Monetary Policy: The Bullionist Contribution, *Southern Economic Journal*, 58 (1) 144-154.
- Laidler, David [1991], *The Golden Age of Quantity Theory of Money*, Harvester Wheatsheaf. (『貨幣数量説の黄金時代』、嶋村絃輝他訳、同文館、1991)
- Locke, John [1963], *Works of John Locke*, vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen. *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest , and Raising the Value of Money, 1692.* (『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978) *Further Considerations concerning Raising the Value of Money, 1695.* (同前) *Two Treatises of Government, 1690, Works of John Locke*, vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen. (『統治二論』、加藤節訳、岩波文庫、2010) (Locke [1991], *Locke on Money*, W. Yolyon, ed., Oxford University Press.)
- Marx, Karl [1971a], *Das Kapital, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 23. (『資本論』、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、第1分冊、1982) [1971b], *Zur Kritik der Politischen Öonomie*, Marx -Engels Werke, Bd 13. (『経済学批判』、杉本俊朗訳、大月書店、国民文庫)
- Mill, J. S. [1965], *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848, 7th ed.1871, *Collected Works*, University of Toronto Press Vol. 2, Vol. 3. (『経済学原理』、末永茂喜訳、岩波書店、全5分冊)
- Misselden Edward [1970], *Free Trade and the Means to Make Trade Flourish*, 1622, Da Capo Press Theatrvm Orbis Terrarvm Ltd, Amsterdam.
- Ricardo, David [1951a], 'On the Principles of Political Economy and Taxation', *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge, University Press, vol.1. (『経済学および課税の原理』、『リカード全集』第1巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970) [1951b] 'Price of Gold', *Works and Correspondence of David Ricardo*, 1951, vol.3 (『金の価格』、『リカード全集』第3巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970) [1951c] 'High Price Bullion', 1810, *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.3. (『地金の高い価格』、『リカード全集』第3巻) [1951d] 'Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee 1811, *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.3. (『ボウズンキト氏の『地金委員会報告書に対する実際の観察』への回答』、『リカード全集』第3巻) [1951e], 'Notes on Bentham's Sur les Prix', *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.3. (『ベンタム「物価論」評注』、『リカード全集』第3巻) [1951f], 'Proposals for an Economical and Secure Currency 1816', *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.4. (『経済的でしかも安定的な通貨のための提案』、『リカード全集』第4巻、1970) [1951g], 'Plan for the Establishment of a Na-

- tional Bank', *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.4. (『国立銀行設立試案』、『リカード全集』第4巻)
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, George Allen & Unwin, London. 『経済分析の歴史』全7巻、東畑精一訳、岩波書店、1955-1962)
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Liberty Fund, in Dianapolis. (『国富論』水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2001-2001)
- [1978], *Lectures on Jurisprudence*, ed. by R. LO. Meek, et al., Oxford University Press, reprint, ted Liberty Fund. (『法学講義』水田洋訳、岩波文庫、2005)
- Steuart, James [1998], *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, ed. by A. S. Skinner, 4 vols. Pickering&Chatto, London,1998. Original published, 1767, *Collected Works of James Steuart*,1805, 7vols. Routsledge/Thoemmes Press. 1995. 小林昇監訳『経済の原理』、名古屋大学出版会、上巻(第1・2編)、1998、下巻(第3・4・5編、1993)
- 日本語文献
- 大森郁夫 [1996]、『ステュアートとスミス』、ミネルヴァ書房。
- 岡崎保 [1993]、『貨幣数量説の新系譜』、九州大学出版会。
- 奥山忠信 [1990]、『貨幣理論の形成と展開』、社会評論社。
- [1999]、『富としての貨幣』、名著出版。
- [2004]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣論草稿』、社会評論社。
- [2009]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣数量説批判』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第9号。
- [2010a]、『金貨幣の合理性に関する考察』、『政策科学学会』、創刊号。
- [2010b]、『ロックの貨幣数量説』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第10号。
- [2011a]、『市場における貨幣量の役割 - David Hume の貨幣論』、奥山・張編『現代社会における企業と市場』所収。
- [2011b]、『アダム・スミスと貨幣数量説』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第11号。
- [2013]、『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望』、社会評論社。
- 奥山忠信・古谷豊 [2006]、『ジェームズ・ステュアート「経済学原理」草稿—第3編 貨幣と信用』、御茶の水書房。
- 小池田富男 [2009]、『貨幣と市場の経済思想—イギリス近代経済思想史の研究』、流通経済大学出版会。
- 清水敦 [1997]、『貨幣と経済』、昭和堂、1997年。
- 千賀重義 [1989]、『リカード政治経済学研究』、三嶺書房。
- 竹本洋 [1995]、『経済学大系の創成』名古屋大学出版会。
- 時永淑 [1970]、『経済学史』、法政大学出版局。
- 中村廣治 [1996]、『リカード経済学研究』、九州大学出版会。
- [2009]、『リカード評伝』、昭和堂。
- 古谷豊 [2003]、『ジェームズ・ステュアートの計算貨幣』、東京大学『経済学研究』、第45号。
- 古谷豊 [2004]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣論の構造』、埼玉大学『社会科学論集』、第112号。
- 堀塚文吉 [1988]、『貨幣数量説の研究』、東洋経済新報社。
- 馬渡尚憲 [1997]、『経済学史』、有斐閣。
- [1997]、『J. S. ミルの経済学』、御茶の水書房。